

フィリッピン革命論

谷川, 栄彦
九州大学法学部

<https://doi.org/10.15017/1554>

出版情報 : 法政研究. 34 (4), pp.1-42, 1968-03-15. 九州大学法政学会
バージョン :
権利関係 :



フィリピン革命論

谷川 栄彦

はしがき

「一九世紀末におけるフィリピンの改良的民族主義」と題して、わたくしは本誌(第二九卷一—三合併号)に小論を発表した。そこでは、大略つぎのようなことが述べられている。——一六世紀の中葉からスペインの植民地支配下におかれたフィリピンでは、土着ブルジョアジーや知識分子の発生にともない、一九世紀七〇年代にはいつてから、民族主義運動が進められるようになった。その民族運動のおもな指導者は、リサール (José Rizal) やデル・ピラル (Marceo H. del Pilar) らであり、一八九二年、リサールの指導のもとに結成された「フィリピン連盟」(Liga Filipina) は、当時の代表的民族主義組織であった。彼らの民族主義は、改良的民族主義と呼ばれるものであって、植民地権力と協調しながらフィリピンの自治を拡大し、その積みかさねによって民族独立を達成することを目ざしていた。それは、植民地主義との武力闘争や非協調によって民族独立を達成しようとする革命的民族主義とは異なっており、穏健なものであった。それにもかかわらず、スペイン植民地主義者は、このような民族主義さえ認めよう

とせず、はげしい弾圧を加えた。もし、フィリピン人が反植民地・解族運動を進めようとするれば、そこには革命的民族主義の武装闘争以外になかった。

本稿は、前稿の後をうけて、一八九二年から一九〇二年までのフィリピン民族解放運動の発展過程を明らかにしようとするものである。この一〇年間の民族運動は、フィリピン史上、「フィリピン革命」と呼ばれ、フィリピン人民によるスペイン植民地権力の打倒と民主共和国の樹立、フィリピンの再植民地化をめざしたアメリカ帝国主義の侵略とそれに対するフィリピン人民の抵抗、米比戦争の激化にともなう土着有産階級の動揺と対米妥協などをおもな内容としている。本稿では、革命的民族主義と改良的民族主義に視点をおいて、その革命運動を検討したい。

一、カティプナンと人民蜂起

カティプナンは、一八九二年七月七日、リサールのダピタンへの流刑が新聞に報道されたその日に、ボニファシオ (Andres Bonifacio) を中心として結成された。その正式の名称は、「人民の子のもっとも崇高でもっとも尊敬すべき同盟」(Kataastasan Kagalang Katipunan ng mga Anak ng Bayan) という長いものであったが、一般には、略してカティプナン (Katipunan) 或いは K.K.K. と呼ばれた。ボニファシオは、一八六三年一月三〇日、マニラの貧困家庭に生まれた。両親にあいついで死なれ、少年の頃からステッキや扇子の手内職・行商によって生計をたすけねばならなかった。十代の後半には「フレーミング社」(Fleming and Company) という商店の配達人兼事務員となり、後には「フレッシェル社」(Fressell and Company) に移って、倉庫番になった。ボニファシオは、小学校教育もろくに受けることができなかったが、生来勉強家で、寸暇を惜んでは独学の道に励んだ。彼は、ロベスピ

エルの『フランス革命史』(スペイン語訳)や、リサールの『社会のガン』・『貧欲の支配』、デル・ピラルの書いた各種小冊子、『ラ・ソリタリダード』紙、ヴィクトル・ユーゴの『レ・ミゼラブル』、聖書などをむさぼり読んだ。なかでも、フランス革命の書物は、彼の革命的民族主義・民族主義思想の形成に大きな影響をあたえた。^(二) ルロイ (James A. LeRoy) によると、「彼(ボニファシオ)はフランス革命に関するスペイン語の論説から近代的改革の理念をつかみ、またパリの群衆蜂起の方法こそが、フィリピン人の立場を改善するための最良の方法であるという考え方を吸収した。^(一)」ボニファシオは、一八九二年七月、リサールの主宰するフィリピン連盟に参加した。しかし、フィリピン連盟の日和見・改良的性格にあきたらなさを感じていた彼は、リサールがダピタンへ追放され、同連盟が凶暴なスペイン権力の前に有名無実化したのを機会に、アレツラノ (Deodato Arellano)、プラタ (Teodoro Plata) の同志とともに、革命的秘密闘争組織としてカティプナンを結成したのである。

それだけに、カティプナンとフィリピン連盟は同じ民族主義組織であっても、両者の性格はひじょうに異なっていた。改良的民族主義組織としてのフィリピン連盟が、平和的手段によるフィリピン自治の獲得を直接的目標としたのに対し、革命的民族主義組織としてのカティプナンは、全フィリピンを民族的に統一し、革命的手段によって独立国家を樹立することをめざしていた。^(三) そして、両者のこのような違いは、主要な構成メンバーの社会的性格の相異によるものであった。フィリピン連盟においては、革命を怖れていたブルジョア・地主層や、彼らの利益・意思を代弁した知識分子が、そのおもな構成要素であったのに対し、カティプナンは、革命をおそれない農民・労働者・都市貧民など下層人民から成っていた。^(四) 後には、有産・知識階級もカティプナンを支持するようになったが、彼らは最初カプティナンへの入会や援助を要請されたときにはそれを拒否した。カティプナンは、まさに“人民の子の同盟”であった。しかしながら、カティプナンの指導者は、その組織とフィリピン連盟・リサールを対立するものとして取扱わなかつ

た。カティプナン結成後も、フィリピン連盟はしばらくの間存続したが、その間ボニファシオはむしろフィリピン連盟のための宣伝活動をつづけた。また、リサールの著作はカティプナン・メンバー (Katipuneros) の間で熱心に読まれ、彼の知らないうちにリサールはカティプナンのシンボルとなり、その名誉議長に推されていた。『ボニファシオの片腕』といわれたハシント (Emilio Jacinto) は、カティプナンの会合で、「フィリピン万才、自由万才、リサール博士万才、統一を！」と叫んだ^(五)。リサールは、カティプナンに対して大きな民族主義的影響をあたえていたのである。

カティプナンの機構は、フィリピン連盟のそれと類似していた。カティプナンは結成直後、「最高評議会」 (Kalastasang Sangunian) と呼ばれる中央執行機関をつくったが、その他数名の委員から構成された。ボニファシオは会計監査役に就任し、その後の役員交替によって一八九四年以後議長になった。カティプナンの勢力が地方に伸びるにつれて、州には「州評議会」 (Sanguniang Bayan)、町 (村落を含めて) には「人民評議会」 (Sanguniang Barangay) がそれぞれ設置された。場合によっては、一つの州に二つの州評議会が設立されることもあった。州評議会と人民評議会とともに、最高評議会と同じような機構をもち、それぞれ議長と数名の委員で構成された。人民評議会は幾つかの細胞組織を統制した^(六)。カティプナンはその組織活動において、フリーメーソン流の方法——メンバーに対する位階 (三階級) の授与、複雑で神秘的な加盟の儀式、象徴名の付与など——を採用し、大いに効果をあげた。新加盟者は、「カティプナンの教儀」に対する忠誠のしるしとして、宣誓書に自分の指の血で署名せねばならなかった。そのカティプナンの教儀は、人間の尊厳と自由・平等、自己犠牲を強調したものであり、それは、ボニファシオの十戒風の草案『人民の義務』に、「カティプナンのブレーション」といわれたハシントが手を加えたものであった^(七)。

カティプナンは人民大衆に対し、フィリピンの解放と民主化を熱心に訴えた。とくに、ボニファシオの活動は積極的・活発であった。彼はフィリピンの過去の栄光を説き、マツチニー(Mazzini)流のやり方で大衆に訴えた。△不幸な祖国を愛せよ！△今こそ祖国のために起ち上がれ！△最後の血の一滴までたたかひぬこう！△——彼は全国各地を遊説し、いろいろな激文やパンフレットを書いた。^(八)カティプナンとボニファシオの積極的宣伝活動は、植民地権力・教団僧の非道な抑圧に呻吟し、政府の改革や改良的民族主義への期待を失いつつあった人民大衆の心をとらえ、彼らを奮いたたせずにはおかなかった。大衆の間に、しだいに民主主義・自由の原理が滲透していった。それにつれてカティプナンの支持者もふえ、その組織もしだいに拡大していった。一八九二年に三〇〇人たらずの同志で出発したカティプナンの勢力は、一八九六年の中頃には三万人を超え、その後さらに増大した。^(九)失業労働者、農民、兵士、政庁書記小商人、教師、土着教師等がカティプナンに加盟した。しかし、財産家、大地主、ミドル・クラス、知識人はそれにそっぽをむいた。彼らは革命をおそれ、ボニファシオとカティプナンを信頼していなかった。^(九)

植民地当局や教団僧は、カティプナンの厳格な秘密保持によって、長いあいだその存在を知らなかった。一八九六年八月一九日、一カティプナン員家族の告白を聞いた教団僧の当局への密告によって、カティプナンの存在とその革命計画があかるみに出た。驚いた当局は、大規模な捜査をおこない、カティプナンの地下印刷所や文書を押えらるとともに、多数の市民を手あたりしだいに逮捕した。カティプナンは、会員の募集や会費の徴収に努める一方、武器弾薬の獲得に全力をあげて革命の準備に奔走していたが、いまだ完了していなかった。植民地権力によって組織をつぶされる危険を感じた、ボニファシオをはじめカティプナンの指導層は、急拠八月二六日マニラ郊外のバリタワク

(Balintawak) に約一〇〇〇名の代表を集めて会合を開き、革命的蜂起を決議した。スペイン支配のシンボルである「人頭税票」(Cedulas)をひき裂き、「フィリピン独立万才」を叫んだ。それは、フィリピン人民による独立のた

めの最初の民族武装蜂起の決議であり、革命への最初の叫びであった。⁽¹⁰⁾「バリタワクの雄叫び」は、フィリピン史に輝かしい一ページを飾っている。二八日、ボニファシオはすべての愛国者にむけて戦争宣言を發した。八月二九—三〇日、バリタワク平原で政府軍との間に最初の戦闘が開かれた。それに呼応して革命闘争は遼原の火の如く拡がり、一カ月以内にブラカン (Bulacan)、パンパンガ (Pampanga)、カヴィテ (Cavite) など八つの州で人民蜂起があいついでおこった。人民は、手に手に小銃、刀 (bolos)、槍、棍棒、石塊などを持って起ち上がった。彼らはそれまで軍事訓練をうけたことはなく、指揮者も軍事の知識や経験はもたなかった。しかし、人民軍は旺盛な戦闘精神に満ちあふれていた。人民軍のほとんどが下層階級の大衆から成っていた。⁽¹¹⁾

スペイン軍はあちこちで後退を余儀なくされ、総督は本国に救援軍を求めねばならなかった。⁽¹²⁾三五〇年にわたったスペインの極民地支配は、根底からぐらつきはじめた。危機に直面した植民地権力は、残酷きわまりないテロでフィリピン人に襲いかかった。無数の市民が逮捕され、むごたらしい拷問をうけ、或る者はグアム島やアフリカの流刑植民地に送られ、他の者は死刑に処せられた。しかし、「監獄における拷問や銃殺刑にもかかわらず、フィリピン人は生命を賭して反乱軍に参加した。革命軍はこうして強化されていった。」⁽¹³⁾反乱の鎮圧に失敗したフランコ (Raman Blanco Y Erenas) 総督はついに辞任し、その職をポラヴィエハ (Camilo de Polavieja) 將軍に譲らねばならなかった。⁽¹⁴⁾新総督は、前任者にも勝る弾圧政策をもって臨み、リサールをはじめ多くの愛国者の大量処刑を断行した。⁽¹⁵⁾リサールは、一八九八年一二月三〇日、刑場の露と消えた。スペイン当局の残忍なテロは、人民の激しい憤りをよびおこさずにはおかなかった。

- (一) T.A.Agoncillo, *The Revolt of the Masses: The story of Bonifacio and the Katipunan*, Quezon city, 1956, pp. 65-68. C. F. Zaide, *The Philippine Revolution*, Manila, 1954, pp. 79-81.
- (二) J. A. LeRoy, "The Philippines, 1860-1898: Some Comment and Bibliographical Notes, Durango, Mexico, 1907" (in Blair and Robertson, ed., *The Philippine Islands 1493-1898*, Vol. LII, Cleveland, 1907, p. 185)
- (三) T. M. Kalaw, *The Philippine Revolution*, Manila, 1925, pp. 6-7. Agoncillo, op. cit., pp. 44-45.
- (四) Agoncillo, op.cit., pp. 45-46.
- (五) *Ibid.*, p. 47.
- (六) Dapen Liang, *The Development of Philippine Political Parties*, Hongkong, 1939, p. 41.
- (七) 「教義」と「人民の子の義務」について M. M. Kalaw, *The Development of Philippine Politics* (1872-1920), Manila, 1926, pp. 71-72. を参照。
- (八) Dapen Liang, op. cit., p.41. Agoncillo, op. cit., pp.91-69. Agoncillo, op. cit., p.97. 及び Charles W. Elliott, *The Philippines*, Indianapolis, 1916, p.191. によれば、一二万三千から四〇万と推定されている。
- (九) Zaide, op.cit., pp. 95-96. *Ibid.*, p. 111.
- (一〇) G.F.Zaide, *Philippine Political and Cultural History*, Manila, 1949, Vol.II, p.166.
- (一一) 当時、フィリピン全体で、マニラにスペイン兵士が三〇〇人とその他地域に約二五〇〇のフィリピン人傭兵がいた。
(*Ibid.*, p.165)
- (一二) T.M.Kalaw, op.cit., p.26.
- (一三) 処刑された愛国者の氏名、職業については、Zaide, *The Philippine Revolution*, op.cit., pp.131-34.

二、革命陣営内部の対立

スペイン軍との戦闘においてもっとも顕著な勝利をおさめたのは、アギナルド (Emilio Aguinaldo) であった。

彼は、一八六九年三月、カヴィテ州のカワイト (Kawit) の裕福なメスティゾ (華僑とフィリピン人の混血) の家庭に生まれた^(一)。彼の父は、当地の有力者の一人であつて、カワイトの町長にも数回選ばれた。アギナルドは、College of San Juan de Letranに進んだが、父の死亡のため中途で退学し、家業 (商業・農業) に従事した。彼は一八九四年にはカワイト町役員に選ばれる一方、同年、秘密結社カティプナンに加わつた。一八九六年八月三十一日、ボニファシオがサン・ジュアン (San Juan) でスペイン軍と戦闘の火蓋を切つたのに呼応して、アギナルドもカワイトのスペイン軍兵營を襲撃した。彼は各地でスペイン軍と戦闘を交え、もちまへの軍事的手腕を縦横に發揮して勝利を博した。それによつて彼の名声と威信は急速にたかまり、カティプナンの最高議長としてのボニファシオを凌ぐほどとなつた。

このようなときに、革命の指導権をめぐる、ボニファシオ派とアギナルド派との間に深刻な対立が生じた。それは、革命の指導をめぐる下層大衆と有産・知識階級の対立でもあつた。アギナルド派によれば、カティプナンは革命準備のための秘密結社であり、革命の勃発によつてすでにその使命を果したので、それを廃止し、現情勢に適した「革命政府」を樹立すべきである、といふのであつた^(二)。これは、貧民を中心とするカティプナンから革命の指導権を奪ひ、富裕・知識階級の参加・指導のもとで組織される「革命政府」にそれをゆだねることを意味してゐた。これに対し、ボニファシオ派は、カティプナンを革命準備組織としてだけでなく、スペイン権力をくつがえした後の革命権力機関とすることを前提としていたので、カティプナンを廃止したり、それにかわる組織をつくることには絶対反対であつた。そして、ボニファシオによると、アギナルドは革命の理念に必ずしも忠実ではなく、もしスペインによつてフィリピンにおける政治改革の道が保障された場合には、よろこんで植民地権力に屈服するだろうと観られてい^(三)た。両派の対立は、当時革命勢力のもつとも強力であつたカヴィテ州においてとくに深刻であつた。カヴィテ州は、

その大半が革命軍によって解放されていたが、その解放区は二つに分れ、その一つは「マグダロ」(Magdalo)と呼ばれてアギナルド派を支持し、他は「マグディワング」(Magdiwang)と呼ばれ、ボニファシオ派に傾いていた^(四)。しかし、こうした対立状況はスペイン側を利するだけで、革命勢力にとってマイナスであったので、両派の対立を解消し、革命闘争を統一化するため、一八九六年一二月末カビテ州のイムス(Imus)において両派の会議が開かれた。しかし、両派は自分の立場を固執して譲らず、ただ次回会議を決めただけであった^(五)。その会議は、一八九七年三月二日、サン・フランシスコ・デ・マラボン(San Francisco de Malabon)のテエロス(Tejeros)で、ボニファシオの司会のもとに、前回会議よりも多くの革命勢力代表を集めて開催された。カティプナンを廃止し「革命政府」を樹立するかどうかの問題が論議された。マグダロ派が優勢を占め、「革命政府」が樹立されることに決まった。そして、選挙の結果、「共和国大統領」にはアギナルドが選ばれ(そのとき彼は戦場にあった)、ボニファシオは副大統領の選挙にも落選し、辛うじて内務相に選ばれただけであった^(六)。しかも、彼が正規の教育をうけていないとの理由で、彼の内相就任を非難する者さえあらわれた。こうして、テエロス会議は、アギナルドの勝利とボニファシオのみじめな敗北に終わった。アギナルド勝利のおもな原因は、彼が輝かしい戦勝のおかげで権威や人気を高め、しかも、いわゆる「カヴィテ人」(Caviteneros)の根強い地方主義に支えられていた点にあった。アギナルドはカヴィテ人であったが、ボニファシオは彼にらとっては「エトランゼ」にすぎなかった。マグデワング派(ボニファシオ派)の代表も同じカヴィテ人であった。テエロス会議の多くの出席者は、両派の議論の客観的判断によってよりも、むしろ地方主義的根性や個人的名声を基礎として、彼らの政治的態度を決定した^(七)。

テエロス会議の多数派は、その決議を全革命勢力の最終決定とみなした。これに対し、ボニファシオは、その諸決定を一つの「事実」としては認めても、最終的・法的なものとして承認することを拒否した。彼は、その理由とし

て、テエロス会議には他の地域の代表が参加していなかったこと、選挙に際しマグダロ派の地方主義的「きたない工作」がおこなわれたこと、そしてその結果、会議の諸決議は多数人民の意思が正確に反映されていないことなど指摘したのである。^(八)しかし、会議における多数決が革命勢力の動向を決定した。ボニファシオは、アギナルド大統領のもとにおける革命政府の成立を認めなかったが、彼に最後まで従った者はごくわずかであった。従来のボニファシオ派やマグデイワング派の大多数が、会議の結果を承認した。テエロス会議の後、アギナルド側の使者ボンソン中佐 (Col. Agapito Bonzon) とボニファシオとの間に和解交渉が行なわれたが、それも失敗に終わった。ボニファシオは彼の弟とともに逮捕され、一八九七年五月六日、軍事法廷において「扇動」・「騒擾」の理由で死刑を宣告された。アギナルド個人は彼らを死刑に処することには反対であったといわれるが、とにかく彼らは、同年五月一日、アギナルド派の一軍人によって、射殺され、悲壮な最後をとげた。^(九)

ボニファシオの死とアギナルド派の勝利は、革命闘争における真に革命的勢力カティアプナンの指導の終りを意味していた。フィリピン民族革命の火蓋を切ったボニファシオは、不幸にも、スペイン人ならずフィリピン同胞の手にかかって倒れ、革命闘争を最後まで指導することができなかったが、革命準備者としての彼の役割は大きかった。彼は組織家として、宣伝活動家として、非凡の才能を示し、多くの大衆を革命陣営の側にひきつけた。彼は、真に人民大衆を信頼し、彼らに依拠しながら民族独立と民主主義をたたかいとろうとした最初のフィリピン人であった。彼が「フィリピン民主主義の父」と讃えられているゆえんである。

こうして、革命陣営内部の対立が激化しつつあったとき、ポラヴィエハ將軍 (総督) の指揮するスペイン軍は、本国から二万の救援軍を仰ぎ、各地で反撃に転じていた。優秀な装備のスペイン軍は、一八九七年四月までに、イムスをはじめカヴィテ州における革命軍の根拠地をつぎつぎに奪回した。反乱は一掃されたかにみえた。しかし、実際は

そうではなかった。革命運動の火の手は、このときまでにほとんどフィリピン全土に拡がり、各地でゲリラ戦が展開されていた。革命運動の鎮圧に失敗したブラヴィエハ総督は、本国に対しさらに救援軍を求めた。しかし、当時キューバ革命に二〇万の軍隊を投入し、その鎮圧に手をやいていたスペイン政府は、総督の要求に応ずることができなかった。彼はそれを不満として辞職し、一八九七年四月、その地位をプリモ・デ・リヴェラ (Fernando Primo de Rivera) 将軍に譲らねばならなかった。⁽¹⁰⁾

カヴィテの根拠地を失ったアギナルド将軍は、革命軍の司令部をブラカン州の天然の要塞ビアクナバト (Biak-na Bato) へ移し、そこからフィリピン軍を指揮する一方、革命に関する各種声明をつぎつぎに発した。そして、革命勢力の代表を召集して、「フィリピン共和国臨時憲法」を制定した。それは、一八九七年一月一日発布され、「ビアクナバト憲法」と呼ばれている。同憲法は一八九五年のキューバ憲法を模範としたもので、スペインからのフィリピン独立、人民の基本的人権、共和政治などが明白に規定されていた。なお、同憲法の効力は二年間と決められた。一月一日、同憲法は革命指導者の議会によって承認され、同日、ビアクナバト共和国が樹立された。大統領にはアギナルド、副大統領にはトリアス (Sr. Mariano Trias) が選ばれ、その他内務、外務、財政、国防の各閣僚も選出された。さらに、香港に「中央革命委員会」 (Central Revolutionary Committee) が組織された。それは、バザ (Jse Ma. Basa) を議長とし、⁽¹¹⁾「香港委員会」 (Hongkong Junta) として知られ、後にはアゴンシロ (Felipe Agoncillo) が議長になった。⁽¹²⁾

フィリピン愛国者が各州においてスペイン軍とたたかっていたとき、改良的民族主義の指導者パテルノ (Dr. Padro A. Paterno) は、スペイン権力とフィリピン革命力との和解工作に奔走した。彼はマニラの著名な弁護士でリサールの友人でもあり、ブルジョア・地主層など有産階級の意思を代表していた。有産階級は、革命運動の勝利を

信用せず、戦乱の拡大による社会秩序の混乱や経済活動の阻害を恐れた。彼らは、革命運動の高揚を利用してスペイン側から或る程度の譲歩を獲ちとり、若干のフィリピン改革を約束させ、他方では革命勢力に妥協を求めて革命の鋒先をおさめさせ、国内の平和を回復することを欲していた。パテルノは、このような有産階級の意図を体し、和平交渉者として働く用意のあることをリヴェラ総督に申し出た。総督は直ちに本国政府の指示を仰いだ。すでに指摘したように、スペイン政府は、キューバ革命の鎮圧のためたくさんの軍隊を投入していたので、フィリピンに増援軍を送ることができず、しかもキューバ・フィリピン両革命の抑圧費は増大する一方であった。財政危機に直面した政府は、フィリピンの資源を保障に四千万ペソ（二千万米ドル）の国債を発行しなければならぬ状態に^(二三)あった。政府は、フィリピンの和平達成のためには、或る程度の譲歩・改革もやむをえないという立場に立った。リヴェラ総督はパテルノの申出に応じ、彼にスペイン軍支配地域の通交証を与えた。

パテルノは、一八九七年八月、ビアクナバトへ赴き、アギナルドその他革命指導者に彼の使命を説明した。彼は、休戦・大赦・改革を基礎としてスペインとの和平交渉に応ずべきことを主張した。さらに彼は、各地を精力的にかけ廻り、革命指導者の説得に努めた。彼は、ビアクナバトとマニラの間をしばしば往復し、総督とアギナルドの意見の交換をくりかえしおこなった。和平問題をめぐって、ビアクナバドでもその他地域においても、指導者の間で意見が分れたが、ビアクナバトの革命本部では、アギナルドをはじめ大多数の指導者が、つぎのような条件で休戦に応ずることに同意した。――

- (1) スペインはフィリピンの改革を実施すること。すなわち、教団の追放ないし少くとも教団の解体、フィリピンに真の正義の適用、土着民とスペイン人の平等な処遇、土着民の高級官吏への採用、財産・税金・教区の土着民側に有利な再調整、集会・出版の自由を含む個人的権利の土着民への許容。

- (2) 革命に参加した人民に対する大赦をおこない、休戦後、彼らに対する迫害・再逮捕をおこなわないこと。
- (3) スペインは革命軍兵士と被戦災者に対する賠償費として、一七〇万ペソを支払うこと。
- (4) 革命勢力は武装を解除し、少くとも三年間は国内の平和を保障すること。
- (5) アギナルドその他革命指導者は国外亡命すること。

一八九七年一月四日、一五の両日、このような条件を内容とし、アギナルドの代理としてのパテルノとリヴェラ総督との間に協定が結ばれた。それは、「ビアクナバト協約」(Bak-na-Bat Pact) として知られ^(一四)いる。「^(一四)体、アギナルドらはなぜこのような和約を呑んだのであろうか？ それは、パテルノと彼の代表する有産階級に対するアギナルドら指導者の妥協の結果にはかならなかった。彼ら自身、有産階級・小ブルジョア上層の出身の知識分子ないし半知識分子であって、旺盛な革命精神をもちながらもその反面では動揺性や妥協性を蔵しており、しかも強固な革命思想や正確な情勢判断、革命の正しい戦略戦術などに欠けていた。彼らはパテルノの執拗な要求に妥協し、休戦協定に応じたのであるが、しかし彼らはスペインのフィリピン改革の約束を全面的に信頼したわけではなく、革命闘争を完全に放棄したのでもなかった。彼らの計画によれば、協約によって受け取る「賠償金」の大半は、フィリピン改革の約束の履行保障金であり、スペインがその約束を実行しない場合には、その保障金を革命再開のための武器購入費にあてるはずであった。そこには、スペイン勢力に対する彼らの不信が十分にうかがえた。実際、アギナルドは、後に香港において第一回分割金として六〇万ペソを受け取^(一五)ったが、そのうち二〇万ペソをフィリピン革命戦士にあたえ、残り四〇万ペソは武器購入資金として香港の銀行に全額貯金した。しかしながら、彼らが革命運動の昂揚したさなかにその指導を放棄し、海外に去ったことは、革命運動にとって大打撃であった。

一八九七年一月二四日、アギナルドをはじめ四〇名の民族主義指導者はビアクナバトを去り、香港にむかった。

スペイン政府は、香港においてアギナルドに対し、一七〇万ペソの賠償金を支払った。ピアクナバト協定は双方に忠実に履行されるかの如くみえた。しかし、スペインおよびフィリピンにおける教団僧は、同協定によってフィリピンに改革がもたらされることに絶対反対であった。彼らの強硬な反対にあい、スペイン政府・リヴェラ総督は、協定を実施できなかつたばかりでなく、大赦によって釈放された愛国者に対する再逮捕や迫害さえ開始された。^(二六)スペインのかかる背信行為は、フィリピン人民の憤激を買わずにはおかなかつた。最初から休戦・和約に反対であつた革命主義者はもちろん、協定に従つた者も、ふたたび武器をとつて革命闘争にたち上がった。かくて、ピアクナバト協約は一片の反古に歸した。

一八九八年二月、パンパンガ州でスペイン軍の活動を阻止する目的で鉄道爆破がおこなわれたのをはじめとして、サムバレス州、イロコス州でふたたび兵火が挙げた。ついでマニラでも暴動がおこり、ブラカン州もこれに呼応して立ち上がった。さらにパムパンガ、ラグナ、パンガシナン、ヌエバ・エシハ、タルラク、カマリネス・ノルテなど諸州の町々はふたたび解放軍によって占領された。セブ島においても人民蜂起がおこつた。中部ルソンでは、一八九八年四月一日、マカブロス (Francisco Macabulos) 將軍の指導のもとに「臨時革命政府」が樹立された。^(二七)

このようなときに、地球の裏側では、アメリカ合衆国とスペインとの間に戦争が勃発した。

- (一) Zaide, *The Philippine Revolution*, op.cit., pp.135-36.
- (二) T. M. Kalaw, *The Philippine Revolution*, op.cit., pp.37-39.
- (三) M.M.Kalaw, *The Development of Philippine Politics*, op.cit., p.78.
- (四) J.A.LeRoy, *The Americans in the Philippines*, Boston, 1914, Vol.I, pp.118-19.

- (五) M.M.Kalaw, *The Development...*, op.cit., pp. 79-80.
- (六) Agoncillo, *The Revolt of the Masses*, op.cit., p.209ff. M.M.Kalaw, op.cit., pp.80-82.
- (七) Agoncillo, op.cit., p.297.
- (八) これは一八九七年四月二四日、彼の親友ハシント (Emilio Jacinto) に宛てた手紙の中で述べられている。(quoted in Agoncillo, op.cit., pp.215-16)
- (九) ボニファシオの逮捕、裁判、処刑については、Agoncillo, op.cit., Chs.Ⅷ-Xに詳しい。
- (一〇) Zaide, op.cit., pp.148-50.
- (一一) 憲法の原文は、M.M.Kalaw, op.cit., Appendix B, pp.418-22.に収録されている。
- (一二) T.M.Kalaw, *The Philippine Revolution*, op. cit., pp.64-65.
- (一三) LeRoy, op.cit., p.124.
- (一四) John Foreman, *The Philippine Islands: A Political, Geographical, Ethnographical, Social and Commercial History of the Philippine Archipelago, Shanghai and Yokohama, 1899*, pp.546-50. T.M.Kalaw, op.cit., pp.67-70.
- (一五) Zaide, op.cit., p.164.
- (一六) Foreman, op.cit., p.550.
- (一七) LeRoy, op.cit., pp.139-40. Foreman, op.cit., p.550ff. T.M.Kalaw, *The Philippine Revolution*, op.cit., pp.80-83.

三、フィリピンの独立宣言

アメリカ合衆国とスペインとの戦争 (米西戦争) は、キューバ問題をめぐって一八九八年四月におこった。当時世界の先進資本主義諸国は、独占資本主義・帝国主義の段階に達し、帝国主義諸国の間では、植民地の獲得や分割をめ

ぐる鬭争が激化の一途をたどっていた。米西戦争は、スペイン植民地を奪取しようとするアメリカ側からの帝国主義戦争であった。^(一) アメリカ帝国主義はこの米西戦争において、スペインの植民地であるキューバ、プエルト・リコのみならずフィリピンやグアム島までも奪いとろうと狙っていた。アメリカ帝国主義は、フィリピンがアメリカ資本の投資・製品販売・原料市場として大きな価値をもつばかりでなく、中国市場との関係においても重要な位置を占めている点を見逃さなかった。ベヴェリッジ上院議員 (Senator Albert J. Beveridge) の米国議会における発言は、アメリカ帝国主義の真意をいかなく物語っていた。

「フィリピンは永久にわれわれのものだ。……フィリピンの彼方には、かぎりない中国市場が開けている。われわれはこの二つのいずれからも後退してはならない。……われわれの余剰生産物のハケ口をどこに求めたらよいのか？……したがって、大平洋を制する列強は世界を制する。その列強はフィリピンとともにあり、それは永久にアメリカ合衆国である。」^(二)

米西戦争がおこると、アメリカ政府はただちに、香港で待期していたデューイ (George W. Dewey) 提督指揮下のアメリカ大平洋艦隊をフィリピンに派遣した。アメリカ艦隊は一八九八年五月一日 マニラ湾で、モントヨ (Patricio Montojo) 提督の率いるスペイン艦隊を撃破した。マニラ湾海戦におけるアメリカの勝利は、大平洋における帝国主義列強としてのアメリカの台頭、フィリピン民族独立鬭争の発展、アジアにおけるスペイン植民地帝国の崩壊を告げる警鐘であった。しかしながら、スペイン艦隊の壊滅は、直ちにフィリピンにおけるスペイン軍の降伏を意味しなかった。フィリピンを征服するためには、海軍のほかに陸軍兵力をも投入せねばならなかった。それに、大平洋を越えてアメリカ本土から援軍を送りこむには相な当日数を要した。そこでアメリカ政府は、広範なフィリピン人民の支持をもつアギナルドラフィリピン民族主義指導者を抱きこんでデューイ提督に協力させ、フィリピン人民の

革命的エネルギーを利用して、米軍の犠牲を最少限にいとめながらスペイン軍を撃破しようとした。アメリカ政府の指令をうけたデューイ提督が、シンガポール駐在のアメリカ総領事プラット (E. Spencer Pratt) やアメリカの香港領事ウィリアムス (Rounseville Williams) を通じて、アギナルドに対し、アメリカの「同情」と「援助」を表明するとともに、アギナルドのフィリピンへの帰国とデューイへの協力を要請したのは、アメリカ側のこうした意図からであった。

アギナルドら民族主義指導者は、アメリカの帝国主義的深謀遠慮を看破することができなかった。彼らは、アメリカがフィリピン人を利用しながらスペインの支配にとって代ろうとしていることに気づかなかった。むしろ彼らは、アギナルドの声明にみられるように、アメリカを「被抑圧人民のチャンピオン・解放者」と考え、フィリピン人民がその「自由国民の援護のもとにある」^(三)と信じていた。アギナルドら一三名の指導者は、アメリカ船「マッククロッチ号」(The McCulloch) で一八九八年五月一九日帰国した。彼らはフィリピン人民の熱烈な歓迎をうけた。デューイは、アギナルドにフィリピン軍の召集を要請し、彼らに若干の武器を与えた。これは、アメリカからの援軍が到着するまでの間、フィリピン軍をマニラ包囲に利用しようとするデューイの作戦にほかならなかった。アギナルドは、デューイの行為を、フィリピン人民とアメリカとの真の同盟関係のあらわれと解釈した。アギナルドは五月二四日、帰国後最初の声明を発し、「救世主」として「強大な北アメリカが、この国(フィリピン)の解放を実現するための努力に対して、無私の援助を与えるためにやってきた」と迷べるとともに、立憲共和政治をおこなうのに適当な時期が来るまで、暫定的に「独裁政府」(Dictatorial Government) を樹立することを明らかにした。そして、五月三

〇日を期して一斉武装蜂起にたちあがるよう人民に呼びかけた。^(四)
 スペイン植民地権力の危機は、まことに深刻であった。ビアクナバト協約にもかかわらず、フィリピン人民の解放

闘争は衰えをみせないばかりか、米西戦争の勃発によって、フィリピンへのアメリカの進攻が必至となり、マニラ湾海戦では、スペイン艦隊が大敗北を喫した。植民地当局は、苦境を脱するため、フィリピン人に若干の譲歩をおこなう、土着のブルジョア・地主層の代表や軍事指導者を抱きこんで、彼らの協力を得ようとした。マニラ湾海戦の直後の五月四日、オーガスティン (Basilio Augustin) 総督が「フィリピン義勇軍」 (Philippino Volunteer Militia) および総督の「諮問会議」 (Consultative Assembly) を設置したのは、スペイン側の苦しまぎれの懐柔工作であった。しかし、これら工作は失敗に終わった。「義勇軍」は最初一部の有力なフィリピン人軍事指導者の関心をよんだが、アギナルドの帰国とその後の革命情勢の発展のもとで、結局は革命軍へ寝返った。また諮問会議には、パテルノタヴェラ博士らの著名な改良的民族主義の指導者が総督によって指名された。彼らは、革命運動の勝利に疑問をもっていたので、「義勇軍」や「諮問会議」の設置に示されたような植民地当局の「改革」的態度を歓迎した。しかし、デューイ提督の「後楯」のもとにアギナルドが帰国し、革命運動の発展と勝利の見とおしが濃くなると、彼らの中には植民地当局の諮問会議議員指名を拒否して、アギナルドの陣営へ走る者さえあらわれた。^(五)このことは、ブルジョア・地主層とその代表が革命運動へ参加しはじめたことを示していた。もともと、彼らは革命を嫌って改革を望み、革命闘争に対しては冷淡な態度をとってきたが、アメリカの「支持」のもとに革命運動が勝利するかもしれないと彼ら自身判断するようになってはじめて、革命運動へ参加しはじめたのであった。もちろんそこには、革命運動の指導権を握り、革命の成果を左右しようという彼らの意図が含まれていた。

実際、アギナルドの一斉武装蜂起の呼びかけは全国津々浦々にこたえました。呼びかけにこたえて各地の人民が小銃や棍棒をとって決起し、続々と革命軍に参加した。革命軍は装備こそ劣悪であったが、その老大な人的力量と烈々たる志気は、スペイン軍をはるかに圧倒した。しかも、五月二七日（一八九八年）には、革命軍のために海外で購入さ

れた武器・弾薬（モーゼル銃二千丁と弾丸二〇万発）が到着し、マニラ湾を征圧していたデュリー提督の同意のもとにカヴィテに揚陸された。革命軍はスペイン軍に対し各地で果敢な攻撃を加へた。スペイン軍も優秀な装備に支えられて頑強に抗戦したが、結局は多くの地域で敗れた。革命軍は、スペイン軍からの捕獲兵器で装備を強化した。総督の組織した「フィリピン義勇軍」の将兵は、武器をもって革命軍に寝返った。こうして、短期間のうちに、革命勢力はカヴィテ、ラグナ、バタンガス、ブラカン、パンパンガ等の諸州およびマニラ市周辺一帯を完全に占拠した。いまやスペインの植民地支配体制は根底からゆさぶられ、植民地支配の牙城マニラは革命軍の包囲をうけて窮地におちいた。^(六)

このような状況のなかで、アギナルド政府は、一八九八年六月一二日、カヴィテ州のカウイトにおいて、フィリピンの独立宣言をおこなった。当日は、革命軍将兵やたくさんの方々の市民の参列によって彩られた。式場にはフィリピン国旗が初めて正式に掲揚され、民族独立のイメージを謳いあげた新しいフィリピン国歌が合唱された。この歴史的式典は、九八人の民族主義指導者による『独立宣言法』（Act of the Declaration of Independence）への署名によって最高潮に達した。^(七)その宣言は、一七七六年のアメリカの独立宣言をモデルとしたものといわれ、その一節にはつぎのように明記されていた。――

「全フィリピン群島の人民の名において、彼らが独立の権利をもっていること、彼らがスペイン王朝に対するすべての束縛から解放されること、両国のすべての政治的紐帯は完全に断たれねばならないこと、彼らがすべての自由・独立国家と同様に、戦争をおこない、講和をむすび、通商関係を樹立し、同盟に加入し、通商を規制し、そして独立国家がおこなっているような他のすべての行為をおこなう完全な権利を保持していることを、ここに厳かに宣言する。^(八)」

独立宣言の主旨を人民に徹底させ、彼らの総力を結集しながら闘いを進めてゆくため、アギナルド政府はまず政治・行政の基礎を民主化する作業に着手した。六月一日（一八九八年）の政令で地方政治機構の整備が始められ、さらに六月二三日のアギナルドの宣言で、従来の独裁政府を廃止し、新たに「革命政府」(Revolutionary Government) と「革命議会」(Revolutionary Congress) が樹立された。その宣言によれば、政府は、大統領のもとに外務、航海・通商、戦争・公共事業、警察・司法・教育・衛生、財政、農業および産業の四つの省で構成された。（後には、国防、内務、外務、財政、司法、fomento の六省に改組された。）各長官は議会に出席し、その質問に答えることができた。議会は政令にもとづいて町長によって選出された議員で構成されるはずであった。（もともと政府は、スペインの支配から解放されたがいまだ選挙を行えない州については、暫定的に議員を指名することができた）。議会は人民の全般的利益の考慮、革命法の審議・制定、条約・賠償の審議・承認、国家財政の審議、すべての国家的問題に関する大統領への勧告などをおこなう権利をもった。大統領は、議会の開催を妨げることはできなかつたが、すべての法案について彼の署名・承認が必要とされ、彼は拒否権をもった。大統領は、議会に対して責任を有した。さらに、議会は、司法委員会の方法によって、各州議会から提訴された司法的事件について裁判所としての役割を果たすことができ、また各省長官や州長・州議회를弾劾することもできた。^(九) 他方、地方政治機構について規定した六月八日の政令によれば、スペインからの独立を欲する二一才以上の住民には選挙権が与えられ、彼らは町長（一名）、部落長（一名。幾つかの部落 *barrios* と都心部で一つの町を構成する）および三名の町参事会員（警察、司法財政各一名）を選挙することができた。町長、町参事会員および部落長で町評議会が構成され、その任務は法律の履行と町利益の監督にあった。町長は、町評議会に諮った後、州知事と州参事会員および中央の「革命議会」議員を選出することができた。^(一〇)

アギナルドの右の宣言につづいて、彼を大統領とする「革命政府」の組閣が行なわれ、各省の長官、局長や陸海軍司令官がそれぞれ任命された。この組閣において特徴的なことは、タヴェラ、アレッラノ、ブエンカミノ (Felipe Buencamino) らのブルジョア・地主層を代表する改良的民族主義指導者が入閣したことである。彼らが革命運動に参加するようになった彼ら側の理由についてはすでに述べたが、革命陣営の側においても、統治機構の複雑・拡大化にともなう、彼らの協力や知識・技術を必要とした。しかし、彼らの政府への参加は、政府の社会的要素や革命指導理論を複雑化し、その後における革命運動の発展に大きな影響をあたえるようになる。

一八九八年八月一日、アギナルド大統領の命令で、全国の市町村会議がバコール (Bacoor) で開催された。これは、フィリピン政治上、最初の市町村長会議であった。マニラをはじめ一六市町の代表が集まった。彼らはフィリピン独立宣言を厳かに批准し、革命政府を承認した。この会議で採択された宣言文は、一九〇人の市・町長によって署名され、そしてアギナルド大統領とイバルラ長官によって認承された。八月六日、この歴史的な文書は、フィリピン独立の承認を要請したアギナルド大統領の文書とともに諸外国へ送付された。^(二一)

- (一) Zaide, *The Philippine Revolution*, op.cit., pp.181-83.
- (二) Congressional Record, 56th Congress, 1st Sess., Jan.9, 1900, p.709 (in R.A. Goldwin, R. Lerner and G. Stourzh, ed., *Readings in World Politics*, New York, 1959, p.266)
- (三) Quoted in James H. Blount, *The American Occupation of the Philippines 1898-1912*, New York, 1912, p.170.
- (四) M. M. Kalaw, *The Development of Philippine Politics*, op.cit., p.106. T. M. Kalaw, *The Philippine Revolution*, op.cit., pp.89-90.

- (五) M. M. Kalaw, *The Development...*, op.cit., pp.109-10. Zaide, op.cit., p.179.
- (六) Zaide, op.cit., pp.182-85.
- (七) *Ibid.*, pp.195-96.
- (八) 原文はじぎに収録されている——M.M.Kalaw, op.cit., Appendix A, pp.413-17.
- (九) 声明テキストは *Ibid.* 423-29 に収められている。
- (一〇) See *Ibid.*, pp.112-15. Zaide, op.cit., pp.201-03.
- (一一) Zaide, op.cit., pp.206-07.

四、スペイン支配の崩壊とフィリピン共和国の成立

アメリカは、フィリピン革命軍がマニラを包囲している間に、メリット (Wesley Merritt) 將軍を最高司令官とする陸軍部隊をフィリピンに送り込んだ。一万一千のアメリカ軍がマニラ市を包囲した。同市の陥落は必至であった。革命軍がスペイン植民地主義に対しとどめの一撃を加えるのは、いまや時間の問題となった。このようなとき、マニラ駐在のベルギー領事アンドレ (Edoward André) を仲介役として、スペイン植民地権力とアメリカ軍首脳との間に、マニラの占領をめぐる取引がおこなわれ、密約がとりかわされた。それによれば、第一に、スペイン側の「面子」を立てるために小規模の戦闘をおこない、戦争を止める場合には両軍から市の城壁に合図の白旗を掲げる、第二に、フィリピン「反乱軍」つまり革命軍との二重占領を避けるために、スペイン軍はアメリカ軍に対してのみ降伏する、そして第三に、「反乱軍」は市内に入城させない、というのであった。^(二)それは、フィリピン人の民族自決権も、そのための彼らの尊い犠牲もこれを認めず、ただひたすらにスペインにとって代ってフィリピンの支配者に

なろうとするアメリカ帝国主義と、取引によってフィリピンを新しい支配者に「譲渡」し、何らかの代償にありつこうとする、滅びゆくスペイン植民地権力の、こうかつで、汚い策謀にほかならなかった。

マニラは、八月一三日（一八九八年）陥落した^(三)。そのときまでに、約四〇〇〇のフィリピン軍がすでに市内に突入していた。しかし、アメリカ軍アンダーソン (Thomas M. Anderson) はメリット総司令官の指令をうけて、マニラ陥落のその日に、アギナルドに対し、「貴下の軍隊は、われわれがスペイン軍の完全な降伏を受けるまで、市内に立ちいってほならない。後日、貴下と交渉する」との電報を送った。アギナルドはこれに強い不満の意を表し、直ちに、「私の軍隊が市内にはいりえることは常に約束されてきており、貴下もそれを知っているはずである^(三)」と反論した。アメリカ軍は、革命政府の意図を無視して、アメリカ軍事政府を樹立した。アメリカ軍の挑発的行動によって、フィリピン軍との間にいざこざが続いた。メリットの後任として新しく赴任したオーティス (Elwell S. Otis) 将軍は、九月八日、アギナルドに対し、もし同月一五日までにフィリピン軍を市内から撤退させなければ、「強制行為」に訴えることを伝えた^(四)。この通達をアメリカ側の最後通牒とみたアギナルド政府は、フィリピン軍を市内から撤退させた。革命政府は、米軍とスペイン当局の密約や、フィリピン軍のマニラ城に対する米軍の否定的・挑発的態度によって、ようやくアメリカのフィリピンに対する本心を疑いはじめるようになった。革命政府は、米軍の出現によって政府の全一性 (integrity) が損なわれるとみた。とくに、アメリカ軍がマニラ市とその周辺一帯を無期限に占領することをおそれた。しかしながら、その反面では、いまだアメリカに信頼をかけ、フィリピンの将来についてアメリカ政府との間に交渉がもたれ、最後にはフィリピンの独立が承認されるものと期待した。

革命政府は、三つの方法でアメリカのチャレンジに対応しようとした。すなわち、①出来るだけ遠くの州まで政府の権威を拡げること、②ブランカ州のマロロス (Malolos) へ政府の根拠地を移すこと（その町まではデューイの艦隊の

砲撃がとどかず、附近の山々はゲリラ戦に適していた)、③先のアギナルド宣言(六月二三日)で公約したように、全国的「革命議会」を開き、憲法を制定し、政府に対するより広範な人民の忠誠支持をとりつけること、などであった。^(五)九月九日、政府はカウイトからマロロスへ移り、そこで同月一五日から議会を開催した。議員の数は、地方における戦争状態や政情不安を反映して一定せず、開会式には約八五人が出席しただけであったが、後に憲法採択がおこなわれるときには一〇〇人を超えていた。^(六)これら議員のうち、先の六月一八日の政令にもとづき各町長によって選出されたものは約半数ないし三分の一程度で、残り議員は政府によって指名されたものであった。その政令によれば、戦争や政情不安で選挙できない地方の代表については、政府がこれを指名することができた。そして、約一〇〇名の出席議員のうち、弁護士四三、医師一八、薬剤士五、実業家七、農企業家四、教師三、軍人三、技術者二、画家二、牧師一であった。^(七)これらの大部分は、カレツシ出身で、幾人かがヨーロッパの大学で学んだ。これら議員のどの程度が、農民・労働者など下層階級を代表し、真に革命的民族主義に徹していたかは不明であるが、その職種から推して、彼らの大半がブルジョア・地主など有産階級に属するか、その出身であって、本質的には改良的民族主義ないしそれに近い立場にあったことはたしかである。サイデもつぎのように迷っている。——「マロロス議会の議員を調べてみると、有産・中間階級や有能で金持ちの人々が、下層階級のボニファシオと彼の貧困・無知な英雄によって出発した一八九六年の革命に、ついに参加するにいたったことがわかる^(八)」と。

議会は、改良的民族主義指導者パテルノを議長として開催された。アギナルドは議会にメッセージを送り、そのなかで、「革命事業は成功裡に終わろうとしている」とし、議会開催の第一の目的は憲法制定にあると迷った。^(九)議会は、九月二九日、先に六月一二日に発せられたフィリピン独立宣言を承認する一方、カルデロン (Felipe G. Calderón) を中心とする憲法起草委員によって作成された憲法草案を審議し(二月二五日から一月二九日まで)、若干の修正を加

えて通過させた。その憲法は、一つの「前文」と一四章一〇一条から成り、一般に「マロロス憲法」と呼ばれた。⁽¹⁰⁾同憲法の作成にあたっては、フランス、ベルギーなど西欧諸国の憲法がモデルとされ、さらにメキシコ、ブラジル、ニカラガ、コスタリカ、ガテマラなどラテン・アメリカ諸国の憲法も参考にされた。フィリピンの事情がこれら諸国と似ている面があると考えられたからである。また、アメリカ合衆国憲法は、マロロス憲法に直接影響を与えなかったが、マロロス憲法の前文は、合衆国憲法のそれに類似していた。

マロロス憲法によれば、すべてのフィリピン人で構成される政治組織が「フィリピン共和国」(Philippine Republic)であり(第一条)、それは自由・独立の共和国であり(第二条)、主権はもっぱら人民にあった(第三条)。フィリピン国民は、憲法によって基本的人権・民主的諸権利を保障された(第六―三三条)。立法権は議会によって行使され(第三三条)、議員は「国家全体を代表し、彼らを選挙した人々だけを代表すべきではなかった」(第三四条)。議会休会中に備えて、「常置委員会」(Permanent Commission)が設けられた(第五四条)。この委員会のおもな機能は、憲法に規定されたケースについて、大統領、議員、閣僚、最高裁判所長官および検事総長へ進言する十分な理由があるかどうかを明らかにすること、および議会が司法裁判所を構成しなければならぬような場合に、特別議会を召集することであった(第五五条)。執行権は大統領にあり、彼は閣僚をとおしてそれを行使した(第五六条)。大統領は議会と制憲会議特別議員によって選出され、任期は四年(第五八条)。閣僚は政府の政策全般に対しては共同で、彼らの個人的行為に対しては各自で議会に責任を有した(第七五条)。司法権は裁判所に属し(第七七条)、その行使は最高裁判所と法律で定められた裁判所によって行なわれた(第七九条)。これを要するに、マロロス憲法は、ブルジョア民主主義憲法の範疇に属するものであったが、そこで特徴的なことは、議会優越の原則、一院制、常置委員会などが規定されていた点である。憲法草案の作成・審議の過程では、議会優越は執行

た。こうしてたかまった大衆の民族主義感情こそ、政府をささえる第一の要素であったが、その第二は、各地に樹立された革命的地方政府であった。カティプナンの蜂起を合図に各地に拡がった革命的独立闘争によって、その基礎をゆさぶられたスペイン植民地体制は、アギナルドの帰国を契機としてフィリピン全土を覆いつくした革命の嵐と、マニラの陥落によって、完全に崩壊してしまった。アメリカ軍の占領するマニラ市とその周辺、および残存のスペイン軍が支配をつづけていた一部の地域を除いて、他のすべての地域は革命軍によって解放され、革命的地方政府の支配下に入った。^(二) スペインの支配は、一八九八年末までにフィリピン人自身の手によって完全にくつがえされた。共和国政府はこれら地方政府を基礎として、全民族的規模においてその權威を及ぼすことができた。したがって、フィリピン共和国は、アメリカの多くの文献・資料に見られるような、一部の「暴徒」(insurgents)の政權や「盜賊共和国」、「紙の政府」ではなかった。それは、フィリピン人による、フィリピン人のための独立共和国であった。

- (一) LeRoy, *The Americans in the Philippines*, Vol. I, op. cit., pp.232-37.
- (二) 軍事行動については、Ibid., pp.238-53.
- (三) Ibid., p.258.
- (四) Ibid., p.263.
- (五) C.A.Majul, *The Political and Constitutional Idess of the Philippine Revolution*, Quezon City, 1957, p.8.
- (六) M.M.Kalaw, *The Development of Philippine Politics*, op.cit., p.121.
- (七) Zaide, *The Philippine*, op.cit., p.253.
- (八) Ibid.
- (九) テキストはつぎに引用されている——M.M.Kalaw, op.cit., pp.123-34.
- (一〇) 同憲法のテキストは、M.M.Kalaw, op.cit., Appendix D, pp.430-45に収録されている。

(11) See Zaide, op. cit., pp.225-35, 242-44.

(12) このフィリピン共和国に関して、約二〇万点にのぼるドキュメントが当時フィリピンを占領した米軍によって集められたが、それらは一九五四年になってはじめて一般に公開された。これらドキュメントは、五〇年以上の間、秘密文書として米陸軍省に保管されていたのである。米陸軍大尉テイラー (John R. M. Taylor) は、その当時これら文書を研究しようとしたが、時の米陸軍長官タフト (William H. Taft) によって禁止された。一九五七年、これら文書はフィリピン政府へ返還された。

五、米比戦争の勃発

フィリピンを占領しようとするアメリカの帝国主義的野望は、米西戦争の結末をつけるパリ諸和会議と講和条約、およびマッキンレー (McKinley) 大統領の「慈善同化宣言」 (Benevolent Assimilation Proclamation) によって明白に暴露された。講和会議は、米比両国代表の出席のもとに、一八九八年一〇月一日パリで開催された。フィリピン革命政府は、アギナルド大統領の特使としてアゴンシロ (Felipe Agoncillo) をパリへ派遣した。革命政府の側からすれば、フィリピンの将来にかかわる重大会議にフィリピン人が出席するのは当然であり、ましてや、フィリピンの支配権を失ってしまったスペインが会議に出席することなど、もってのほかであった。アゴンシロは講和会議への列席を執拗に要求したが、すげなく拒否された。ここに、フィリピン民族の立場もフィリピン革命政権の存在も認めようとしないうちに、米・西植民地主義の姿がハッキリあらわれていた。講和条約は、一八九八年一二月一〇日締結され、フィリピンは、スペインからアメリカへ「譲渡」されることとなった。その条約の要点につきのとおりであった。すなわち、①スペインはフィリピン、グアムおよびプエルトリコをアメリカ合衆国へ譲渡する、②アメリカはスペイン

ンに対し二〇〇〇万ドルを支払う、③スペインはキューバから主権を撤退する、④譲渡された領土の住民の市民的、政治的地位は、アメリカ議会によって決められる、などであった。^(二)アメリカは、スペインから獲得したフィリピンをフィリピン人に返還する意思はまったくなかった。それどころか、マッキンレー大統領は、一八九八年一月二一日「慈善同化宣言」を発表し、アメリカがフィリピンにとどまり、その独立を認めないこと、力によってアメリカの主権をフィリピンに拡大することを明らかにした。^(三)

フィリピン革命政府のアメリカに対する期待は、完全に裏切られた。アメリカがフィリピンの独立を承認するであろうというアメリカへの期待が、甘い幻想にすぎなかったことをにがしく思い知らされた。革命政府がパリ講和条約とマッキンレーの「慈善同化宣言」に反対であったことは、いうまでもない。政府を代表したアゴンシロは、講和条約締結の二日後の一月二日（一八九八年）、講和条約に対する公式の抗議文を発表し、その条約がフィリピン人の意思を無視して締結されたものであり、それは「われわれの政府を拘束するものとして受け入れられない」と述べた。さらに彼は、パリからワシントンに行き、アメリカ議会における講和条約の批准を阻止するため活発な宣伝活動を進めた。^(三)他方、アギナルド大統領も、一八九九年一月五日、声明を発表し、パリ講和条約と「慈善同化宣言」に強硬に反対した。フィリピン人民大衆の間では、アメリカに対するごうごうたる非難がまきおこり、反米感情がみなぎった。彼らは祖国独立のためにはすべてを犠牲にして、新しい外国支配者とたたかう決意をあらたにした。各州の知事も、アギナルドを支持し、彼に無条件の忠誠を誓い、外国の支配に反対するたたかいに彼らの生命・財産を投げ出す覚悟を決めた。革命陣営の間では、アメリカとの戦争を要求する声さえ急速にたかまりつつあった。

アメリカ軍と革命軍との関係は、嫌悪の一途をたどっていた。革命政府は、できるかぎりアメリカとの戦争を避け交渉によって事態の平和的解決をはかろうとした。政府は、オーティス米軍総司令官に対し、米軍とフィリピン政府

の交渉機関として米比混合委員会を設けることを申し出た。これに対し、事態の重大性を知っていたオーティス将軍も、アメリカからの援軍が到着するまでいかなる紛争の勃発もこれをひき延ばし、時間を稼ぐことを考えた。彼は革命政府の要求に応じた。委員会の会議は、一月一日から同月三十一日（一八九八年）まで六回にわたって開催された。会議の目的は、「フィリピン人民とアメリカ人民の相互理解を深める」というのであったが、会議は何らの成果もなく決裂した。第一に、米軍側はフィリピン共和国の承認を拒否し、フィリピン側代表をアギナルド将軍の代表として以外に、いかなる政府の代表として認めることも拒否した。そして、アメリカの歴史と伝統を基礎として、アメリカの主権の枠内で、フィリピンに自治政府が許されることを明らかにした。他方、革命側も、アメリカの主権を受け入れることを拒絶し、フィリピン独立の承認を主張した。こうして、会議は双方の立場の相異と対立をいっそう鋭くした^(四)だけであった。

この間、アメリカ国内でも、パリ講和条約の帝国主義的性格に猛烈な反対がおこり、賛否両論鋭く対立していた。反対派の中心は、「反帝国主義連盟」(Anti Imperialist League)であった。それは、アメリカ政府の帝国主義的政策に反対し、「アメリカの理念と一致しないような、合衆国主権の外国人民への強制的拡大に反対し、とくにフィリピンの早期・完全独立のために絶えず活動する」ことを目的として、一八九八年ポストンにおいて結成された。その連盟は、レーニンが指摘したように、「トラストとの、したがって資本主義の基礎との帝国主義のたちきれない^(五)関係を認めることをおそれ」、独占資本主義としての帝国主義に反対するものではなかった。同連盟を積極的に推し進めたのは、民主主義的、良心的知識人であった。連盟は、活発な反帝国主義的宣伝活動を展開した。パンフレットの発行や講演会を瀕繁におこなう一方、調査員をフィリピンに派遣して実情を調査させ、フィリピン独立に有益な報告をおこなった。また、フィリピン人をポストンに招き、あらゆる方法でフィリピンの正しい姿をアメリカ人に知らせよう

と努めた。当時、アメリカでは、政府の帝国主義政策が強まるにつれて、それをチェックしようとする風潮もたかまっていた。反帝連盟は、こうした風潮と自らの積極的活動によって、広範な国民的支持をうけ短期間に勢力を拡大した。連盟のメンバーは結成らしい一年以内に三万人を超え、寄金者は五〇万人に達した。ニューヨーク、ワシントン、シカゴなど全国一〇〇カ所に支部が結成された。元大統領のクリーヴランド (Grover Cleveland)、同じくハリソン (Benjamin Harrison)、作家のマーク・トウェイン (Mark Twain)、AFL会長ゴムパース (Samuel Gompers)、実業家のカーネギー (Andrew Carnegie) など、著名人が多数連盟に加入した。^(六)

反帝連盟の活動がアメリカの世論に大きな影響を与えたことは、想像に難くない。政府の帝国主義政策を支持する保守層は、反帝連盟を「国賊」呼ばわりした。議会では、民主党の大部分、「人民党」 (Peoplise' Party)、「シルヴァー共和党」 (Silver Republican Party) と共和党の一部が講和条約に反対であった。彼らも反帝連盟と同じ様な立場から条約に反対し、条約の批准にあたっては、まず最初に、将来フィリピンに独立を認める宣言をおこなうか、或いはそれと同様な条約の修正をおこなうことを条件としてのみ、条約に賛成するという態度をとった。議会では、条約の賛成派と反対派の勢力が伯仲し、批准は必ずしも樂觀を許さない状況にあった。

このようなときに、フィリピンでは、アメリカ軍をフィリピン革命軍との間に大規模な戦闘が勃発した。それは、米国上院で講和条約批准の投票がおこなわれる二日前の一八九九年二月四日のことであったが、その戦闘は条約批准問題と決して無関係ではなかった。すなわち、アメリカ政府はパリ講和条約締結以後、フィリピンにおける将来の紛争に備えてぞくぞく増援部隊を投入した。すでに述べた如く、オーティス米軍総司令官が米比混合委員会の開設に応じたのも、増援部隊到着までの時間稼ぎにすぎなかった。米比混合委員会の会議も何らの成果を見ずに決裂し、米軍側の作戦準備も整った。あとは、いつ戦闘を開始するか、時間の問題だけであった。二月二日、「秘密命令」が米軍

將兵に下された。「アメリカ軍の旅団長は、部下將兵に対し、出来るだけ紛争（フィリピン軍と）をひきおこすよう語った」^(七)。そして、二月四日夜、ネブラスカ州出身の歩哨兵が、「：がわれわれの前哨線に潜入してきた」と叫んで、パトロール中のフィリピン兵士に発砲し、彼を射殺した^(八)。双方から砲撃が開始された。フィリピン軍司令官は直ちにオーティス將軍に対し、休戦と中立地帯の設置を申出た。だが彼は、戦闘はすでに始まったのだから「最後の最後まで」たたかわねばならないとしてとりあわなかった。四、五両日の最初の戦闘で、米軍は大勝利を博した。フィリピン軍は多くの戦死傷者を出し、大打撃をうけた。二月五日、オーティスは米陸軍省に対し、「作戦は暴徒が一方的に守勢に立ち、わが方は勇敢に攻撃を加えた」と報告した^(九)。その戦闘は、ハースト系の新聞や他の好戦論者によって、米国内にセンセーション^{ヨナル}に報導された。それは、米国内の世論や、条約の批准に反対している上院議員に圧力を加えることを狙いとしていた。上院では、三分の二の賛成票を得て条約が批准されるにはさらにもう二票必要であったが、フィリピンからの戦闘の報導は条約の運命を決定した。二月六日、条約は辛うじて批准された。一方、フィリピンに対するアメリカの主権の放棄とフィリピンの独立承認を規定した「ベーコン決議案」(The Bacon Resalution)は、結局一票の差で敗れた^(一〇)。

二月四日の戦闘を契機に、アメリカとフィリピン共和国は戦争状態にはいった。それは、アメリカ帝国主義の仕掛けた植民地戦争であり、フィリピン共和国にとって死活の独立戦争であった。米陸軍部隊は本國からの増援を受けて十分な軍事力をもっていた。とくに最新装備の砲兵隊の威力はすばらしかった。しかも、マニラ湾を支配している米海軍が陸軍を援護した。これに対し、フィリピン軍の装備・訓練・戦略戦術は、米軍と比較できないほど劣っていた。約五万のフィリピン軍のうち、モーゼル銃やレミントン銃など小銃で装備されていたのが二万足らずで、残りは竹槍や蓄刀や棒等をもっているにすぎなかった。兵士はスペインに対する独立革命中に志願した者が多く、志気きわ

めて旺盛であったが、正式の軍事訓練をうけた者はなかった。同じことは、将軍や将校についても言うことができた。彼らは革命中にゲリラ指導者として活躍し、将軍や将校となったもので、正規の軍事訓練を受けておらず、軍事計画・用兵・戦術等の知識にも欠けていた。アメリカ軍は有利に作戦を展開した。⁽¹¹⁾三月三十一日(一八九九年)には、フィリピン共和国の首府マロロスも米軍の手中に落ちた。

- (一) G.F.Zaide, *Philippine Political and Cultural History*, Manila, 1949, Vol. II, pp.239-40.
- (二) J.A.LeRoy, *The Americans in the Philippines*, Boston, 1914, Vol. I, p.400.
- (三) M.M.Kalaw, *The Development of Philippine Politics*, Manila, 1926, pp.231-36.
- (四) *Ibid.*, pp.172-75.
- (五) レーニン「資本主義の最高段階としての帝国主義」(「レーニン全集」第二十二巻、大月書店版、三三三ページ)
- (六) 反帝国主義連盟についてはつぎを参照——Labor Research Association, *U.S. and the Philippines*, International Publishers, 1958, pp.10-12.
- (七) *Quoted in Ibid.*, p.8.
- (八) Zaide, *op.cit.*, pp.297-99.
- (九) *Quoted in Labor Research Association, op.cit.*, p.8.
- (一〇) Zaide. *op.cit.*, pp.301-303.
- (一一) *Ibid.*, pp.282-84.

六、フィリピン人民の抵抗

アメリカは、こううした有利な軍事情勢を足場に、主権の拡大と支配体制の確立に乗り出した。マッキンレー大統領

領に指名された「シャーマン委員会」(Shurman Commission)が三月四日フィリピンに到着し、活動を開始したのは、そのあらわれであった。この委員会は、コーネル大学総長シャーマン(Jacob G. Shurman)を委員長とし、予備役提督デューイ(George Dewey)、前駐支公使デンビー(Charles Denby)、陸軍少将オーティス(Elwell S. Otis)、マシガン大学教授ウースター(Dean C. Worcester)の各委員から成っていた。委員会の主な任務は、米国主権の最も平和的で効果的な拡張を促進することを目的として、米国政府のフィリピン政策を実施するとともに、フィリピンの状況を調査し、大統領に報告することにあつた。委員会は、四月四日、政府の対フィリピン政策の基本原則を⁽¹⁾発表し、フィリピン人民が自治の範囲内において、「安寧・幸福・繁栄を保障」されるであろうと述べた。しかし、その自治も、アメリカ國務長官ヘイ(John Hay)のシャーマン委員会への五月五日付訓令によれば、総着(米人)の絶対的拒否権を前提とした制限付自治であつた。⁽²⁾

アメリカ軍の大規模な攻撃に直面し、再植民地化の危機に立ったフィリピン共和国では、対米政策に関して指導者間の見解の相異が顕著となり、三派に分れて対立した。第一のグループは、アメリカ軍との戦争によってフィリピンの独立をたたかいとろうとする最強硬派で、指導者層ではルナ(Antonio Luna) 将軍やマルヴァル(Miguel Malvar)など軍首脳がこれに属した。人民大衆の大多数もこの立場を支持した。第二のグループは、フィリピンの独立を求める点で第一のグループと同じであつたが、どちらかといえば、戦争よりもむしろ交渉や政治的手段によって、独立をアメリカに承認させようとする点で特徴があり、マビニ首相がそのグループの頂点に立った。第一、第二の立場は「独立派」と呼ばれ、いずれも革命的民族主義者がこれに組みした。それから第三のグループは、「独立派」に対して「和平派」ないし「自治派」と呼ばれ、タヴェラ、パテルノ、ブエンカミノなど改良的民族主義者に指導され、いかなる犠牲を払ってでもアメリカと和平を達成し、アメリカの許容する自治を受けいれようとした。⁽³⁾ 彼ら

は、シャーマン委員会の政策を支持した。ブルジョア・地主層を代表するこの自治和平派は、スペイン権力のもとにおいても自治の要求にとどまり、植民地権力の強大な間は人民の革命的独立運動にそっぽをむいてこれを支持しようとせず、ただ、革命運動の有利なときにのみそれに参加し、そのかぎりにおいて「革命的」活動をおこなった。しかし、強大なアメリカ帝国主義のために独立の前途が危くなると、たちまち彼らの本性を暴露し、帝国主義と徹底的にたたかおうとせず、ただ植民地的自治に甘んじようとした。こうしたブルジョア・地主層の民族独立運動における動揺性は、他の東南アジア地域の民族解放運動においてもみることができた。右の自治和平派は議会で強い勢力をもっていた。前述の如く、多数の地主・ブルジョア層の代表が「革命議会」に参加していたからである。彼らは、マビニ首相を中心とする独立派の活動をいちじるしく牽制した。

対米政策をいかに進むべきか、国民の世論をたしかめ、それにもとづいて決定しようとしたマビニ内閣は、世論にはかるため、シャーマン委員会に対し三週間の休戦を要請した。しかし、同委員会はそのを拒否し、むしろフィリピン人が武器を放棄することを要求した。他方、自治和平派によって多数を占められたフィリピン「革命議会」は、もはや実質的には革命的でなくなり、改良主義勢力の橋頭堡となり代っていた。議会は和平を望み、アメリカによってあたえられる自治を基礎としてオーティス將軍との間に了解が達せられるよう努力すべきことを決議し、アギナルド大統領領に対し、マビニ内閣を辞職させ、アメリカ当局の信頼を得るような内閣を組織するよう要求した。^(四)フィリピン共和国憲法によれば、内閣は大統領をとおして議会で責任を負っていた。アギナルド大統領も議会に同調し、和平内閣を組織するようパテルノに要請した。こうして、一八九九年五月九日、マビニ内閣に代って、自治和平派の首領パテルノを首班とし、ブエンカミノを外務長官とする新内閣が成立した。

パテルノ政府は、ブエンカミノを団長とする使節団をマニラに派遣し、米軍当局と和平交渉をおこなわせようとし

た。しかし、それは、ルナ將軍の突然の介入によって妨害された。米軍との和平に反対していた抗戦派のルナ將軍は、戦場から電報をうって和平使節のマニラ派遣を中止させようとしたが、それが無視されたと知るや、使節団を逮捕し、売国行為の理由で彼らを投獄した。そのため政府は新使節団をマニラに送って、米軍当局と交渉をおこなわせた。フィリピン側は、今後の政策について民意を問うため一時休戦を要求したのに対し、アメリカ側は和平の条件としてフィリピン軍の降伏を主張して譲らなかった。しかし、パテルノ政府としても、こうした条件に応ずれば革命軍のはげしい反撃にあうことを知っていたので、直ちにアメリカ側の要求をのむわけにはゆかなかった。米軍との休戦交渉に失敗した政府は、やむなく、戦争の継続を人民に宣言した（一八九八年六月二日）。

フィリピン軍は、頑強な抗戦意欲にもかかわらず、強大なアメリカ軍の攻撃の前には齒がたたず、いたるところで敗戦をかさねた。米軍はしだいに占領地域を拡大していった。共和国の首府は、マロロスからサン・インドロ（San Isidoro）、カバナトアン（Cabanatuan）、タルラク（Tarlac）、バヤンムバン（Bayambang）へと転々と移しかえられた。アギナルド・フィリピン軍最高司令官（大統領）は、一八九九年一月一二日、バヤンムバンにおいて、共和国軍を解体し、小単位のゲリラ隊に再編成することを指令した。他方、オーティス米軍総司令官は、一月二四日、本国政府に対し「暴徒」の壊滅を報告した。しかし、それはあまりにも楽観的にすぎた。米軍は、緊密に提携したフィリピン大衆とゲリラ隊の果敢な抵抗をうけ、一九〇〇年一月五日にはマッキンレー大統領はさらに八万人の兵士をフィリピンに送らねばならなかった。実際ゲリラ隊は、強固な「軍民総ぐるみ」の体制で戦闘を進めた。彼らは、強大な米軍の攻撃をうけたときはいち早く市民の間にまぎれ込み、有利な情勢がやってきたときには指揮者の号令のもとに銃をとって参集し、神出鬼没の攻撃を加えた。フィリピンの「町」（town）は一般の町の通念とは異なり、「都心部」（town proper）と農村地帯のたくさんの「部落」（barrio）から成る特異な行政体であった。

が、たとえその都心部が陥落し、そこに米軍事権力の地方政府が樹立されても、農村部の住民はもちろん、政府役人(フィリピン人)さえ、「友人」(amigos)としてゲリラに協力し、精一杯の援助を与えた。彼らは、食料、隠れ場所、敵側情報、兵士の提供などあらゆる物的・精神的援助を惜しまなかった。^(五)『フィリピン革命』の著者サイデは、アンクル・サム(アメリカ人)に対するフィリピン人ゲリラの果敢な活動を詳細に追いながら、彼らを讃え、つぎのように述べている。

「アンクル・サムの優秀な軍事力によって、戦争は一方的ゲームであったが、フィリピン戦士は一定の勝利を得ることができた。彼らは、武器、戦術、訓練の点でヤンキー侵略者に劣っていたが、決して戦闘には負けなかった。彼らはすばらしいゲリラ戦士であった。彼らは、台風のように早く追撃戦に移り、接戦において山猫のように勇猛心を振り、崇高な目標に対してキリスト十字軍のように勇敢に死を選んだ。彼らは戦略・戦術についてはほとんど知らず装備も物資も軍事訓練も不十分であった。しかし彼らは、勇気と闘争心と自由愛をもって、アメリカ人とたたかうことができた。」^(六)

アメリカ軍は、革命軍の勇敢で巧妙なゲリラ作戦に手をやき悩まされた。革命軍の鎮圧に失敗したオーティス総司令官は、一九〇〇年一月五日、マックアーサー(Arthur MacArthur 後の駐日占領軍最高司令官 Douglas MacArthur の父) 将軍と交替させられた。マックアーサー指揮下の米軍は、徹底的ゲリラ掃討作戦をおこない、フィリピン人に残酷なテロを加えた。ククラブ(米軍ライフル銃)で奴らを開明せよ^(七)、水治療で気合いを入れろ^(八)——これが米軍のスローガンであった。拷問、殺害、焼打ちなどテロのかぎりをつくした。無数のフィリピン人民がテロの犠牲となり、苦しんだ。しかしそれでもなお、ゲリラ戦は強固な民族的団結のもとに、各地で執拗に続けられた。マックアーサー将軍自身、ゲリラ作戦が「全土着民の統一的活动に依存しており、そのような統一が事実である

ことは、議論の余地がない^(九)」ことを認めざるをえなかった。

- (一) これは、M.M.Kalaw, *The Development of Philippine Politics*, op.cit., pp.185-86.
- (二) *Ibid.*, p.188.
- (三) L.H.Fernandez, *The Philippine Republic*, New York, 1926, pp.155-58. Dapen Liang, *The Development of Philippine Political Parties*, Hongkong, 1939, p.53.
- (四) Dapen Liang, op.cit., pp.53-54. LeRoy, *The Americans in the the Philippines*, op.cit., p.89ff.
- (五) Kalaw, op.cit., pp.220-24.
- (六) Zaide, op.cit., p.336.
- (七) 拷問の一種で、水が鼻や耳からとび出すまで無理にのませ、そうしてむちで叩く。この過程をなんどもくり返す。当時の米軍法務局長グロスベック (Grosbeck) 中佐は、「わたしは、この『水治療』が捕虜から情報をとるもっとも人道的方法である」と公言した。(Labor Research Association, *U.S. and the Philippines*, op.cit., p.9.)
- (八) Zaide, op.cit., pp.349-51.
- (九) Quoted in Kalaw, op.cit., p.224.

七、共和国の動揺と降伏

アメリカの侵略に対し、フィリピン人民が将兵も農民も、労働者も都市住民も、打って一丸となって、激烈な血みどろの独立闘争を続けていたとき、他方では、自治和平派の指導者は、マックアーサー米軍総司令官や、シャーマン委員会の後身・「タフト委員会」^(一) (Taft Commission) と接触を保ちながら、「平和と自治」の運動を進めた。米軍の捕虜となっていたパテルノ首相をはじめブエンカミノ、マキシモ・パテルノら六人のパテルノ内閣の閣僚は、一

九〇〇年六月二一日のマックアーサー將軍の大赦令によって釈放された。彼らは、タフトやマックアーサーへの協力を惜しまなかった。彼らは、釈放されたその日にマニラで政治集会を開き、和平達成の方策を討議し、さらに六月二八日にはマニラで大赦令祝賀会をはなばなく開催した。

しかし、このような自治和平派の運動は失敗に終わった。大衆は米軍の權威に支えられた和平運動を齒牙にもかけなかった。マックアーサー將軍も、その運動が惨めな結果に終わったことを認めざるをえなかった。^(三) アギナルド將軍は、北部ルソンの根拠地から戦闘を指導し、一九〇〇年六月三〇日には人民に声明を發し、アメリカ帝國主義との闘争をつづけるよう激励するとともに、ブエンカミノ、パテルノらの和平工作を非難した。アギナルドのブレイン、フィリピン革命の頭脳”と呼ばれたマビニも、米軍に逮捕され、後にパテルノらとともに釈放されたが、彼はフィリピン獨立の要求を棄てず、自治和平や米軍当局の和平運動へのかつぎ出し工作にも頑として応じなかった。さらに、マニラ市内では、一九〇〇年八月、旧カティプナン員を中心とする秘密組織が結成され、アギナルドの指令のもとに米軍へのレジスタンスを続けた。^(三)

一九〇〇年八月初めには、フィリピンのゲリラ活動は最高潮に達した。アギナルド將軍の指令のもとに各地のゲリラ指揮者は戦術を強化し、米軍をくり返し襲撃した。彼らは、義和団事件のために多数の在フィリピン米軍が中国へ派遣されることや、米國の大統領選挙において帝國主義者のマッキンレー大統領と共和党が敗れるかもしれないという見とおしなどによって元気づけられた。アギナルド大統領は、一九〇〇年九月いらいイサベラ (Isabela) 州の要塞の町パラナン (Palanan) に根拠地をおき、米軍に対するレジスタンスを指揮しつづけた。

しかし、一九〇一年一月八日、アギナルドの密使が米軍の捕虜になったことから、パラナン根拠地を急襲され、アギナルド大統領は、同年三月二三日、米軍に逮捕された。彼は、最初アメリカへの恭順を拒んだが、最後にはそれに

従い、四月一七日、フィリピン人民への声明を發し、米軍との和平を受けられるよう呼びかけた。アギナルドの逮捕と人民への和平呼びかけは、直ちにフィリピンの全面降伏をもたらすことはなかったけれども、革命軍や人民大衆の抗戰意欲を奪い去ってしまった。彼らの間に、急速に敗北感が漲った。しかも、こうした情勢は、自治和平派に指導された「連邦党」(Federal Party)の積極的な活動によってさらに強められた。連邦党は、一九〇〇年一月二三日、タヴェラ、ブエンカミノらを先頭に、改良的民族主義者や富裕階級の参加によって結成された。同党の基本目標は、フィリピンを植民地的地位から昇格させ、アメリカ合衆国の各州と同等の権利をもつ自治州にすることにある。同党は、米国の主權受諾による和平を望み、革命主義者の米軍への投降を促がすことを当面の目標とした。^(四)

連邦党は、最初ごく一部の人々を除いてほとんど支持されなかった。革命勢力の指揮者は、連邦党を売国奴と非難し、タヤバス州などでは、その州の革命軍司令官の命令によって、連邦党の支持者は罰せられた。^(五)しかし、戦争の長期化によって人民大衆の間に疲労感が強まり、しかもアギナルド大統領の逮捕によって革命軍の敗色が濃厚になるにつれて、多くの人々が平和を欲し、交渉をとおしてフィリピンの独立を達成することを期待するようになった。こうした情勢は、連邦党の台頭を促した。米軍当局の厚い信頼を受けていた連邦党を利用して、米軍政にとり入ろうとする者や、同党を支持することによって、米軍当局の弾圧や報復を免れようと考えた人々が競って入党し、党勢も急速にひろがった。一九〇一年四月頃までに二〇万以上の支持者を得たといわれる。^(六)連邦党の積極的な和平活動は、大衆や革命軍將兵の抗戰放棄に大きな影響をあたえた。同党の発表によれば、その精力的な反戦・和平宣伝活動によって革命軍の將軍一四名、中佐二八名、小佐二〇名、ゲリラ指揮官六名、大尉四六名、中尉一〇六名、兵士二六四〇名が投降した。^(七)しかし、こうした状況の中にあっても、革命軍の抵抗は続けられた。バタンガン州の司令官マルヴァル(Miguel Malval)將軍が、アギナルドに代って革命軍の總指揮をとった。彼は、マニラから四〇マイルの地点にあ

る「マキリング」(Makiling) 山から宣言を発し、アメリカが独立を認めるまでたたかうこと、および外交問題の解決を香港の革命委員会に委任することを声明した。彼は、一年以上にわたって米軍の激しい追撃をかわし、南部ルソン(バタンガス、ラグナ、タヤバン、ミンドロの各州から成る地域)を中心として果敢なゲリラ戦を展開した。また、ウイサヤ島、セブ島、ボホル島などでも、各地の革命勢力の根強い抵抗がつづけられた。しかしながら、マルヴァル軍は、将校がだんだん捕虜になったり投降したりして戦力を失い、一九〇二年四月一六日にはマルヴァル將軍自身米軍の軍門に降った。彼は、五月六日、戦争の終結を宣言した^(八)。フィリピン委員会は、まだ各地で抵抗が残っていたが、一九〇二年九月八日、アメリカ合衆国大統領に対し、「全面完全平和の状態が樹立された」ことを報告した^(九)。

こうして、フィリピン民族革命は、強大なアメリカ帝国主義によって無残におし潰されてしまった。かつては自由・平和・博愛を掲げてイギリス植民地主義に挑戦し、独立を達成したアメリカも、いまや自己の利益のためには他民族の自由・独立を抑圧してはばからない帝国主義的下手人になり代っていた。フィリピンの革命勢力は、人民大衆を指導して、アメリカにフィリピンの即時独立を認めさせるか、或いは、一時的にはアメリカの主権を受諾しても将来における独立を承認させることをめざしてたたかった。しかし、闘争は中途にして敗れ去った。その敗退の原因については、彼我の軍事力の差があまりにも開きすぎたこと、アギナルド大統領をはじめ革命指導者がつきつきに捕虜となったことなどいろいろ挙げることができるであろう。しかし、この点で、ブルジョア・地主層や自治和平派の役割を見逃すことはできない。彼らは、革命闘争の有利な時期にはそれに参加したが、闘争のもっとも困難な時期に民族戦線から脱落し、無条件的和平・自治工作をおこなって、アメリカの占領支配の足場を提供する一方、人民の闘争心をくじけさせる役割を演じたのである。

フィリピン民族革命は、スペインから獲得した独立を守りとおすことができず、ふたたび外国植民地主義の支配に

道を譲らねばならなかったが、革命的民族主義に貫かれた革命闘争の歴史的意義は、きわめて大きかった。第一に、アジアで最初の、アジア人によるアジア人の独立民主共和国が樹立された。この共和国は、わずか一五カ月にして倒れたが、アメリカの侵略がなかったならば、強固で安定した民主的発展を遂げたにちがいない。第二に、民族革命はフィリピン人民に民族の自由・尊厳の精神をたたきこみ、その後のアメリカ支配下における民族独立運動の精神的支柱となった。そして第三に、革命闘争は独立・自由に対するフィリピン人民の決意をアメリカに知らしめ、その後におけるアメリカの支配政策を慎重ならしめる要素となった。

(一) タフト委員会はシャーマン委員会の後をうけて一九〇〇年三月二六日、マッキンレー大統領によって設置された。司法官 William H. Taft が委員長となり、前テネシー州検事総長 Luke E. Wright、元サモア最高法院判事 Henry C. Ide、カリフォルニア大学教授 Bernard Moses、ウースター教授らが委員として名をつらねた。

(二) LeRoy, *The Americans in the Philippines*, Vol. II, op.cit., p.255.

(三) Zaide, *Philippine Political and Cultural History*, op.cit., pp.346-48.

(四) 連邦党の結成、綱領については、Dapen Liang, *The Development of Philippine Political Parties*, op.cit., p.50ff.

(五) *Ibid.*, p.59.

(六) *Ibid.*, pp.62-63.

(七) *Ibid.*, p.63.

(八) Kalaw, *The Development of Philippine Politics*, op.cit., pp.224-26; Zaide, op.cit., pp.356-53.

(九) 米比戦争において、フィリピン共和国側は一万六千人以上の戦死者を出したほか、約二〇万の市民が米軍収容所で餓死ないし病死した。他方、アメリカ側は約七千人の戦死者を出し、三億ドルにのぼる戦費を使った。(Labor Research Association, *U.S. and the Philippines*, op.cit., p.9; Zaide, op.cit., p.359.)